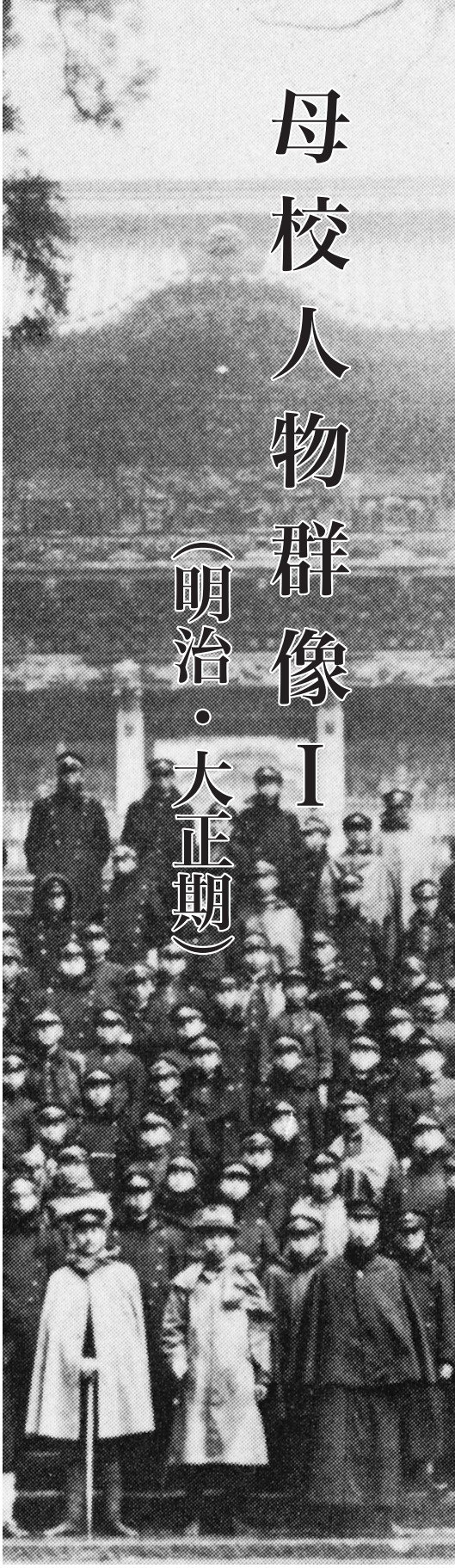
母校人物群像Ⅰ（明治・大正期）



※ 掲載人物は編集委員会が選択し、執筆・編集しました。

＊富士見村小暮校舎（卒業生合計二十五名）

明治十五年卒　初の卒業生は七人

第一回卒業生全員

大竹直四郎　・渋川市・呉服商

佐野友三郎　・前橋市曲輪町・山口県立図書館館長

沢　玄三　・前橋市国領町・前橋中学教諭

寺沢（富樫）精一　・前橋市天川原町・キリスト教宣教師

豊田　宣　・前橋市堀川町・桑名高等女学校校長

降屋虎雄　・沼田市・横浜高等女学校校長

山崎金四郎　・桐生市・高崎市助役

（縁故者）

高山　昇　・伏見稲荷神社宮司

本校の前身第十七番中学利根川学校（前橋）は、第十八番中学烏川学校（高崎）とともに、明治十年十二月に設立された。場所は、現前橋地方裁判所東隣附近と思われ、これを本校の創立としている。その後、明治十二年十二月、両中学の発展的解消の上に前橋一箇所に、県立「群馬県中学校」が誕生し、翌十三年一月二十六日開業式を挙げた。この日を本校の開校記念日としている。校舎は当面群馬県師範学校（現大手町の合同庁舎付近）を使用した。ここから、明治十五年一月小暮村（現富士見村）に新築なった自前の校舎へ移転した。

ここで最初の卒業生を送り出すべく、同年五月、第一回の「卒業証書授与式」が挙行された。『明治四十四年前橋中学一覧』には「卒業生六名ナリ当校ノ卒業生ヲ出セシハ之ヲ初トス」とある。しかし『同窓会名簿』には、上記のように七名の名前と縁故者一名が記されている。

漱石の友人、東大初の美学担当教授 大塚（小屋）保治

（明治元～昭和六／一八六八～一九三一）

「群馬県中学校」時代の卒業生で、同期卒業わずか五名である。旧姓は小屋、勢多郡笂井村（現前橋市）の出身。東京帝国大学で哲学を学び、在学時の友人に夏目漱石がいる。岡倉天心に師事、ヨーロッパ留学後、明治三十三年東京帝国大学美学講座担当の初代教授となる。芸術論・欧州文芸史・絵画論を中心とする名講義は評判となった。妻は、当時美貌の才媛として評判であった詩人の大塚楠緒子である。日露戦争時、「ひとあしふみて夫思い／ふたあし国を思へども／三足ふたたび夫思ふ／女心に咎ありや」の、厭戦詩「お百度詣」は有名である。彼女は、夫保治の友人夏目漱石から文学的・人生的影響を受けたといわれるが、保治

が彼女と結婚した三ヶ月後に、漱石は高等師範学校講師を辞して、遠く四国の松山中学の教師となって東京を離れた。漱石も彼女への強い思いがあったのであろうか。名作「坊っちゃん」は、保治と楠緒子の結婚がなかったら、誕生しなかったのかもしれない。

（明治十七年卒）

倫理学者で東洋大の第六代学長

中島徳蔵（なかじまとくぞう）

（元治元～昭和十五／一八六四～一九四〇）

佐波郡今井村（現伊勢崎市）生まれ。東京帝国大学哲学科を卒業後、井上円了が創立した私立哲学館（その後の東洋大学）で西洋倫理史と倫理学を担当。東京工業学校（現東京工業大学）、跡見女学校、共立女子職業学校などでも道徳、哲学、倫理学の教鞭をとった。一九二四（大正十三）年六月から東洋大学学長事務取扱となり、二六（大正十五）年二月、同大学の第六代学長に就任、二八（昭和三）年三月まで務めた。

中島を有名にしたのが〇二（明治三十五）年十二月の哲学堂事件。卒業試験の倫理学の学生の答案の中に、「動機が善ならば弑逆（しいぎゃく・主君や父を殺すこと）も許される」というミュアヘッドの教科書の一節を見つけた文部省の視学官が国体上容易ならないものと断定。哲学館は特権として認められた中等教員の無試験検定の資格を取り消された。この事件は社会的な問題に発展し、同省の私学撲滅策という批判も出た。担当の中島講師はすべての教職を罷免され、〇五（昭和三十八）年に復職した。

（明治十八年卒）

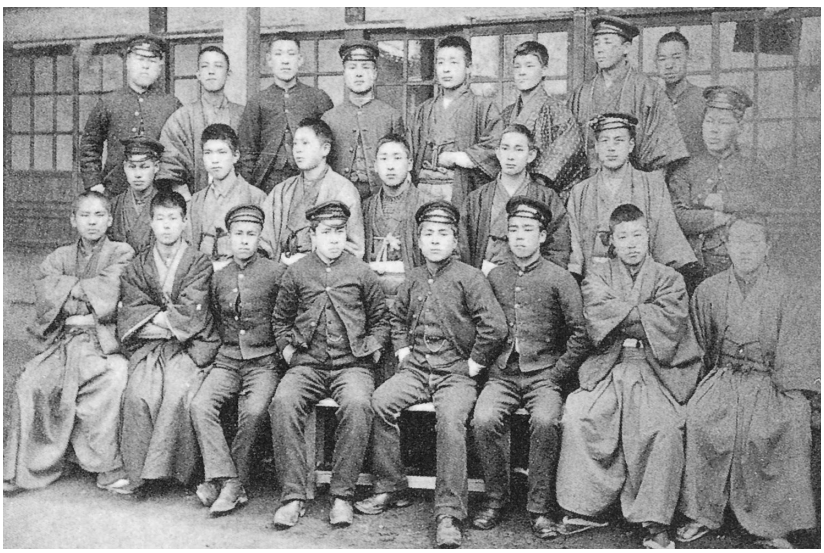
海軍大臣で終戦時の首相

鈴木貫太郎（すずきかんたろう）

（慶応三～昭和二十三／一八六七～一九四八）

慶応三年、泉州久世村（大阪府堺市）に譜代大名久世家の代官鈴木由哲の長男として生まれる。明治二年東京に移り、後父親が関宿（千葉県）勤務となったため関宿久世小学校に入学。が、教育に熱心だった父親が前橋は教育環境がよいことを聞き及び群馬県庁に職をかえたため前橋に転居し桃井小学校に通う（ただ一説には関宿藩は明治維新後朝敵となったことから、つてを求めて群馬県庁に職を得たとも言われる）。前橋中学校を経て明治十七年海軍兵学校に入校。日清戦争、日露戦争に従軍。日露戦争では日本海海戦に参加。後、連合艦隊指令長官や海軍軍令部長を歴任。大正十一年に海軍大将。昭和四年昭和天皇の侍従長となる。昭和十一年の二・二六事件時には青年将校に襲撃されるが一命を取り留めるものの辞職。枢密院議長を経て昭和二十年四月内閣総理大臣に就任し終戦に尽力する。このため暴徒に官邸、私邸が焼き討ちにあった。戦後は関宿に隠棲し、昭和二十三年逝去。

（明治十九年縁故）



明治中期の生徒たち
（明治29年）

＊紅雲町校舎時代
明治二十年から昭和九年六月まで

鈴木貫太郎の弟で陸軍大将

鈴木孝雄

（明治二～昭和三十九／一八六九～一九六四）

明治二年生まれ。前橋中学校等を経て明治二十二年陸軍士官学校に入校する。明治二十五年三月陸軍砲兵少尉に任官。明治二十七年には日清戦争に従軍。日露戦争開戦時には野砲兵第八連隊補充大隊長を命じられる。明治四十五年には砲兵大佐となる。大正三年陸軍省軍務局砲兵課長、大正六年陸軍少将となる。大正十年陸軍士官学校長を経て陸軍中将に進む。その後陸軍技術本部長、軍事参議官などを務め昭和二年には陸軍大将となる。昭和八年予備役編入。昭和十三年には靖国神社宮司（昭和二十一年一月退任）。昭和三十九年に死去。終戦内閣総理大臣の鈴木貫太郎海軍大将の弟。兄弟で大将となった例は極めて稀である。

（明治二十年縁故）

社会学の泰斗、千葉商大を創設

遠藤隆吉

（明七～昭二十一／一八七四～一九四六）

自前の資力で、巣鴨中学校（大正十一年）次いで、巣鴨商業学校（大正十三年）、更に巣鴨高等商業学校（昭和三年、現在の千葉商科大学）を創設し、教育に尽くした。自立独行の人。

家が貧しかったため、全員寄宿生活を送る小暮の前橋中学に入学することが叶わなかったが、廃校の事態となり、諸方面の尽力により龍海院の仮校舎で授業を始めることになったため、明治二十二年に入学。教育熱心な父の下に、十歳から英語を、また、隣家の漢学者から漢文を学ぶ。当時の前橋中学では殆どの教科書が英語であった。

一高から東京帝国大学文科大学へ進み、大学では哲学を専攻、心理学・社会学にも大きな関心を寄せたようである。その成果が、東大卒業後一年目、二十七歳の傑作『支那哲学史』（明治三十三年）となる。社会思想史的な観点から書かれた画期的なものである。

束縛を嫌う隆吉は、多くの大学からの専任の招聘を断り続け、独自の研究を深め、明治四十年には、『近世社会学』で文学博士の学位を取る。また、自らの設立になる「社会学研究所」から『社会及国体研究録』を月刊で発行し、隆吉をはじめ、河上肇・吉野作造・金子馬治・佐々木惣一・米田庄太郎などの執筆者により、社会運動・労働問題・政体論と多岐に渡る分野で啓蒙に勤めた。

「骨太の自由人として生き、学界、言語界、教育界に偉業を成し遂げた博士の生き方の根底には、自主独立、自由の尊重、社会への責任があった。」（町田三郎「遠藤隆吉博士の生涯―忘れられた先覚―」『同窓会誌第44号』）

（明治二十五年卒）

専修大総長在職中に急逝

須賀喜三郎

（明治七～昭和十七／一八七四～一九四二）

群馬郡倉賀野町（現高崎市）生まれ。東京帝国大学法科大学法律学科卒業後すぐに判事に任じられ、東京区裁判所に勤務。その傍ら専修学校（現専修大学）の講師となり、大学理事、法学部長、教授、学監を歴任した。一九四二（昭和十七）年四月、総長に就任したが、三カ月足らずの同年六月十五日、脳溢血で急逝した。四日後の十九日、同大学で大学葬が営まれた。担当科目は民法債権、手形法、民法総則などで、四十年間を誠実一筋に学生の教育にあたった。判事としては東京地方裁判所部長、東京控訴院部長、広島控訴院長、大審院部長を務めた。

（明治二十五年卒）

アメリカに日本学を育成

角田柳作

（明治十～昭和三十九／一八七七～一九六四）

22頁に詳述。

（明治二十八年準）

同窓会長を三十五年、公選初の前橋市長

関口志行

（明治十五～昭和三十三／一八八二～一九五八）

政治家・弁護士。俳人、号は雨亭。新田郡木崎町（太田市新田木崎町）生まれ。澤柳政太郎、鈴

木券太郎両校長時代に在学。このうち鈴木校長時代には、生徒による教頭排斥や校長排斥の同盟休校（ストライキ）が起こったが、元衆議院議員清水留三郎（明治三十四年準卒）によると、温厚だった氏は処分を受けなかったという。また斎藤玉男（明治三十二年卒）によると、野球部初代投手で前橋公園の川が真中を流れるグラウンドで、川を飛び越えながら師範学校と試合をしたという。（『百二年史』）

明治三十三年群馬県中学卒業、旧制二高（仙台）から京都帝大英法科卒業。山梨地裁判事を経て、前橋市内で弁護士開業。その後、二度の県議、衆議院議員、県監査委員を経て、昭和二十二年第十二代前橋市長となり、病気辞任まで三期十一年間務める。この間に、県市長会長、群馬戸籍事務協議会長、前橋市立工業短大学長等を歴任。大正十年から十四年にかけ、母校でたびたび同盟休校が起こった際、生徒から一人の犠牲者も出なかったのは、県議、同窓会長として生徒擁護に回ったのではないかとの指摘がある。

松根東洋城に師事し俳人としても知られる。臨江句会を設立、句集として『雨亭句集』がある。久保田万太郎、高浜虚子、高橋香山、村上鬼城、松野自得らと親交があった。

大正十二年から昭和三十三年まで第二代同窓会長を、三十五年の長きにわたり務めた。

（明治三十三年卒）

校歌の作詞者、前橋公園に詩碑

平井駒次郎（晩村）

（明治十七～大正八／一八八四～一九一九）

小説家・詩人。前橋市本町生まれ。本名は駒吉。前橋市桃井小卒業、旧制前橋中に入学。明治三十二年二年生の時鈴木校長排斥のストライキに加わり停学処分を受け、自ら退学。同級生で元タイ芸術院美術学校校長三木栄（明治三十六年卒）の回想によると、隣の席の晩村は、「講義など少しも聴かず、いつも小説めいた、道化的の文章を書いて私の方へ廻して来たが皆が読んで吹き出すものだから遂に先生に見つかってしかられたことがあった」という（「中学時代の思い出」～『八十七年史』）。

上京して明治義会中に入学したころから、短歌、詩を投稿し認められた。明治三十六年早大高師部国語漢文科入学、卒業後報知新聞社に入社した。報知新聞では「明治三大探偵実話」「陸奥福堂の下獄記」の連載、『風雲回顧録』など実録風の著作を刊行した。大正三年退社、文筆生活にはいるが、妻富子を亡くし帰郷。『少年倶楽部』『日本少年』などに少年小説を、『武侠世界』『面白倶楽部』などに歴史小説を発表した。また上野毎日新聞の主幹となり、このころ旧制前橋中の校歌を作詞した。

校歌の制定については、学校から後藤、小松両教諭が晩村を訪問して作詞を依頼し、同時に作曲は東京音楽学校に依頼したい希望を述べた。晩村は八方から依頼されている原稿をさしおいて校歌の作詞に専念したという。多忙な生活の中にあってこの仕事を「閑を求める如き仕事として物質で求めることの出来ない満足が得られるもの」に感じて精を出し、出来上った歌詞を本校の後藤、小松両教諭及び校歌作成委員屋代、高田、小林等に渡した。これらの人々の協議の上、東京音楽学校の大須賀乙字に作曲に就いての尽力を依頼し、中田章の作曲になる校歌が三月四日に晩村のもとに、更に本校に届けられた（『八十七年史』）。

詩集に『野葡萄』、『茶摘唄』、『麦笛』がある。帰郷後、健康を害し、大正八年病没、享年三十五歳。高橋清七、関口志行、野中康弘ら旧友の手によって前橋市臨江閣南の公園に詩碑が建てられた。

（明治三十六年縁故）

わが国で最初の資本論完訳者

高畠素之

（明治十九～昭和三／一八八六～一九二八）

『資本論』の日本最初の完訳者として、教科書にも登場する有名人である。大正九年大鐙社から全十冊、十四年改訂版を新潮社より、昭和二年定本を目指し改造社から十五万部発行された。前橋市北曲輪町に生まれ、前中時代は、『坂東太郎』の幹事を勤め、自らも十数編の社会的関心をもとにした論稿を寄せている。五年生の時、前橋教会で洗礼を受け、牧師を目指して同志社神学校へ進む。折りしも日露戦争中で、前中の後輩に軍人志願者が増加していることを憂いて、同志社から『坂東太郎』四十一号（明治三十八年三月）に寄稿した。

『野守』の同人（明治37年12月28日撮影とされる）

『野守』は、萩原朔太郎が編集責任者となって発行した回覧雑誌。写真後列右端が朔太郎、左端が町田佳聲

「聞けば五年生諸兄の中には軍人志望者が多きとの事、時節柄戦争熱に浮かされる事なく、只管社会の要求に対する我が使命を自覚なされん事を全校の諸兄に熱望いたし申候……トルストイ翁曰く戦争を絶滅するには軍人志望者を無くするにありと」と書いた。井上日召は高畠を、「同級生間で最も人望のある者の一人だった」と評している。なお、夫人は前橋清心幼稚園の保母をしていた初江である。明治四十一年、『坂東太郎』OBを中心に、初期社会主義雑誌として評価されている『東北評論』を高崎から発刊した。ロシア革命を契機に、彼の思想は国家社会主義へと傾斜していくことになる。

（明治三十七年卒）

右翼で血盟団事件の首謀者

井上日召

（明治十九～昭和四十二／一八八六～一九六七）

暴力による国家革新を目指す一人一殺主義を掲げた血盟団の中心となって、昭和七年要人暗殺計画を実行して、前蔵相井上準之助、三井合名会社理事長団琢磨が犠牲となった血盟団事件で有名となった右翼指導者。父は富士見村で医師の修行をしていた時、富士見村原之郷の星野つねと結婚し利根郡川場村で開業医となり、その四男として川場で生まれた。前中時代の教室の様子を、井上はその著書で次のように記している。「学校では休みの時間中、（日露）戦争話ばかりでヤソ組（キリスト教信者の生徒たちの意味）と他の生徒との間に、時々あまり激烈ではない主戦論と非戦論とあったが……ある日ヤソ組の誰かが内村鑑三の非戦論を持ち出して盛んに論じ立てたもんだから、その日は意外に激烈になり、怒鳴り合いになり、仲裁者がなければ立ちまわりになるところだった……普通生徒間に交換される話題、例えば卒業してどこの学校に行くとか、将来何になるつもりだとか、テンで傍へもよったことがなかったが、この戦争談、殊に主戦非戦の論戦には少なからず関心を持った」と。なお、明治三十八年四月、非戦論者内村鑑三の講演会が学内で開催された。

（明治三十八年卒）

「月に吠える」で鮮烈なデビュー

萩原朔太郎

（明治十九～昭和十七／一八八六～一九四二）

近代口語自由詩を確立した詩人として知られる。一九一七（大正六）年に発表した『月に吠える』が詩壇で絶大な評価を受け、詩人として確固たる地位を得た。他に『青猫』『蝶を夢む』などの作品がある。現在の前橋市千代田町で開業していた萩原医院の長男として生まれたが、家業を継ごうとはせず、前橋中学時代に短歌をはじめとした文学に傾倒した。二年の時にいとこの萩原栄次に短歌作法を学び、やがて編集責任者となって校内で手書きの回覧雑誌「野守」を発行。四年になると中央の文芸雑誌への投稿・発表が増え、「文庫」「明星」などに数十首が掲載されるまでになった。

中学時代、朔太郎は最終学年の五年進級に失敗。二度目の四年生の時、妹の親友「エレナ」（馬場ナカ）に恋をした。長女の萩原葉子（故人）は作家、葉子の息子、演出家の萩原朔美は孫にあたる。

二五（大正十四）年、朔太郎三十九歳の時に刊行された第四詩集「純情小曲集」の中に「郷土望景詩」と名づけられた詩群がある。「中学の校庭」はその冒頭に置かれた作品。「艶（なま）めく情熱になやみたり」など、青春時代の苦悩や哀感が表現された作品になっている。（明治三十九年卒）

中学の校庭
われの中学にありたる日は
艶（なま）めく情熱になやみたり
いかりて書物をなげすて
ひとり校庭の草に寝ころび居しが
なにものの哀傷ぞ
はるかに青きを飛びさり
天日（てんじつ）直射して熱く帽子に照りぬ。

九十歳で「日本民謡大観」を完結

町田佳聲（英）

（明治二十一～昭和五十六／一八八八～一九八一）

民謡研究家。本名嘉章。佐波郡伊勢崎町（伊勢崎市）生まれ。祖父の反対を押しきって、旧制前橋中に進み、庭球部に入ったが、軽度の乾性肋膜炎を患い運動を断念。四年生のとき詩人萩原朔太郎の影響を受けて文学で身を立てたいと考えたが、家族に反対された。前中時代には、学友会雑誌部部長をつとめ、『板東太郎』に絵や投稿が掲載された（四十二～四十四号）。また、明治三十八年の劇「光の使」の背景を描いた。東京美術学校図案科（東京芸大）に入学したが在学中に目を患い、同校卒業後美術記者となるものの一年で退社した。

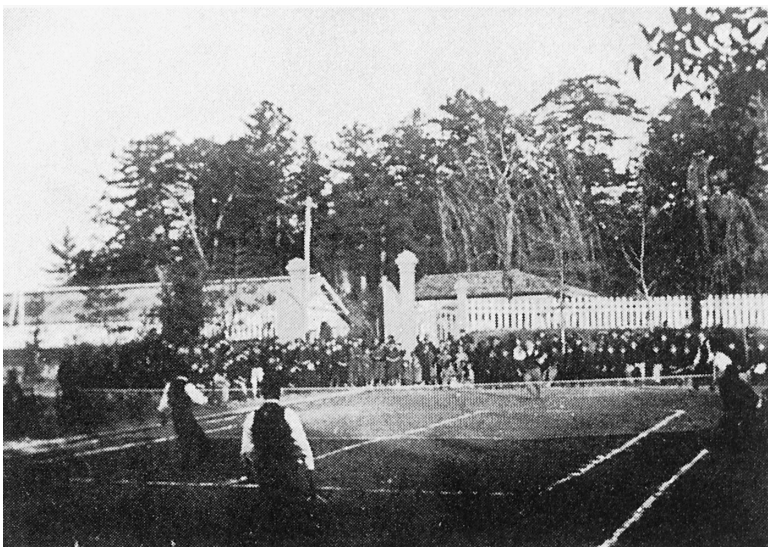
十九歳から三味線を始め、長唄・清元・常盤津・新内などあらゆる邦楽を手がけた。三年間の療養中に長唄研精会に入り、杵屋四郎三郎の名を受ける。大正六年ころ箏の宮城道雄が朝鮮から帰り起こした新邦楽運動に加わり、大正十四年のＮＨＫ創立から昭和八年まで八年間邦楽を担当した。その後、柳田国男の影響で日本民謡の集成を決意し、全国に採集旅行を行った。集めた祭礼や季節行事の民謡は六千曲。昭和五十五年九十歳で記念碑的な『日本民謡大観』全九巻を完結した。民謡を五線譜に採譜することを考え出し、新作民謡の作曲も六十曲以上に及ぶ。代表作は『ちゃっきり節』。また、東京芸大で芸能史の講師をつとめた。毎日出版文化賞、紫綬褒章、ＮＨＫ放送文化賞、モービル音楽賞、吉川英治賞受賞。『豊後節の考証と研究』などの著書がある。（明治三十九年卒）

文部次官から成城大学学長に

山崎匡輔

（明治二十一～昭和三十八／一八八八～一九六三）

明治二十一年二月九日生、昭和三十八年八月八日没。大正四年東京帝大工科大学土木工学科卒。



校庭でのテニス大会
（明治36年）

五年鉄道院技師、九年東大助教授次いで教授となる。昭和二十年文部省科学教育局長、二十一年文部次官、二十三年東京都教育委員長、二十四年日本放送協会常務理事、二十七年成城学園長兼成城大学長。この間鉄道軌道、トンネル工学、都市交通の研究で業績をあげ、鉄道工学、土木学界の発展に貢献した。日本学術振興会理事長、国立国語研究所評議委員会副会長、鉄道建設審議会委員などを歴任。著書に「都市鉄道工学」。

（明治三十九年卒）

外交官から神奈川県知事を二十一年

内山岩太郎（うちやまいわたろう）

（明治二十三〜昭和四十六／一八九〇〜一九七一）

明治二十三年前橋市天川原町に生まれる。前橋中学校から明治四十年東京外語学校に進む。明治四十五年外務書記生となり在スペイン公使館に勤務。以後外交官として活躍する。昭和十二年アルゼンチン公使。昭和十七年七月には広田弘毅に和平を進言する。昭和十八年外務省を退官。昭和二十二年四月神奈川県知事に当選する。川崎臨海工業地帯の造成や津久井郡城山ダムの建設に尽力する。昭和四十二年、在職二十一年におよぶ神奈川県知事を辞す。

ある年の初めＮＨＫが関東の知事を集めて新春座談会を催したとき、自分は神奈川県の知事であるにもかかわらず開口一番「群馬県民の皆様明けましておめでとうございます」と言ったというエピソードがある。

（明治四十年卒）

日本プロ野球の生みの親

鈴木惣太郎（すずきそうたろう）

（明治二十三〜昭和五十七／一八九〇〜一九八二）

野球評論家。伊勢崎市本町生まれ。両親は医師になることを勧めたが、鈴木は嫌い、前橋・敷島小から厩城高小をへて旧制前橋中を卒業。前中時代は庭球部の主将として活躍。また、野球部ＯＢ会名簿にも名前が見える。早大商科に進学したが、大倉高商（東京経済大）英語科に転学、卒業して大正九年渡米、前橋市駒形町出身の小松晋助が営む小松商会のエージェントをするかたわらコロンビア大に学んだ。渡米に当たり、叔父の帝劇専務・山本久三郎からニューヨーク・ウォール街で株屋の支配人をしていたジャクソンへの紹介状を貰った。ジャクソンは訪ねてきた鈴木に、食事をふるまおうとしたが、鈴木は野球が見たいと希望、これがアメリカのプロ野球と鈴木を結びつけるきっかけとなった。鈴木は、ジャイアンツの名監督ジョン・マグローら多くの大リーグの監督・選手と交流、昭和四年帰国すると、読売新聞社長に就任したばかりの正力松太郎は、鈴木を運動部顧問に迎えた。鈴木は読売新聞のみならずさまざまな雑誌新聞上にアメリカ大リーグ情報を執筆した。翌昭和五年正力の命を受けて渡米、大リーグ招聘を交渉、昭和六年一月のアメリカ大リーグ初来日を実現した。鈴木は、再度の大リーグ招聘のため、昭和七、八、九年と渡米、大リーグ選抜軍の招聘に成功する。とりわけ、昭和九年来日直前まで契約できなかった本塁打王ベーブ・ルースを直接交渉によって加えることに成功したことは、鈴木の功績である。十月一日、ルースが散髪のため入ったニューヨークの床屋で、ベーブ・ルースが描かれたポスターを見せながらの交渉であった。アメリカ選抜軍のバンクーバー出港のわずか二十日前のことである。

一方、これを迎え打つ日本チームがなかったため、全日本軍を結成。これが同年十二月誕生した日本初のプロ野球チーム「大日本東京倶楽部」の母胎であり、「東京ジャイアンツ（巨人）」へと続くプロ野球球団のさきがけとなった。鈴木は日本プロ野球生みの親ともいえる。昭和二十年、日本野球連盟が復活すると、鈴木は副会長となり、後楽園、甲子園、西宮球場の米軍からの返還に尽力、実現させた。

また、鈴木は母校のため、大正十三年ＯＢチーム厩城スターのコーチとして来橋したり、ベーブルース杯を制定し、前橋市医師会と伊勢崎赤石クラブとの定期戦を開催するなどした。昭和四十四年野球殿堂入り。著書として『近代野球戦術』『ベーブ・ルース』『ルウ・ゲーリッグ』『日本一沢村栄治投手』『アメリカ野球史話』『米国の野球』『米国名選手伝』がある。

（明治四十一年卒）

詩人で煥乎堂社長を務める

高橋元吉

（明治二十六～昭和四十／一八九三～一九六五）

詩人。煥乎堂社長。「遠望」「耽視」「耶律」などの詩集がある。昭和三十七年「高橋元吉詩集」で高村光太郎賞受賞。（明治四十三年卒）

満州開拓の父、張作霖爆殺に関与

東宮鉄男

（明治二十五～昭和十二／一八九二～一九三七）

明治二十五年八月十七日生、昭和十二年十一月十四日没、宮城村出身。大正四年陸軍士官学校卒。近衛歩兵第三連隊から、九年志願して歩兵第五十連隊に転じシベリアに出征、十二～十三年自費で広東に留学、十四年大尉、十五年奉天の独立守備隊第二大隊中隊長となり、昭和三年河本大作大佐の張作霖爆殺に関与した。四年歩兵第十連隊中隊長、六年満州事変勃発で吉林軍顧問、七年関東軍司令部付となり日本人の満州移民を推進、第一次武装移民四百十六人を佳木斯に入植させた。八年少佐、九年満蒙開拓青少年義勇軍の前身大和村北進寮を創設、十二年歩兵第二連隊付、同第百二連隊大隊長（中佐）として出征、同年杭州湾北岸で戦死、大佐に昇進。（明治四十四年卒）

祖父　元吉のこと

高　橋　里枝子

鎌倉に療養のため転居するまでの、小さな私の中にある元吉は、家の門を入ると、通路を境に左半分が苔だけの深い海の様な庭で、私が行っても振り向かず、しゃがんだまま、苔の中の雑草を取り続けていた細くまるまった後姿が印象的であった。なんとなく声をかけるのが悪いような「孤独」を感じた。

元吉は、私の家に来るときも、いつも黒いマントを着てスーと入って、苔の庭の時と同じで、私を見ても黙っていた。たぶん、初めて買ったのであろう抱き人形を、庭にいた私のところへ来て、懐に手を入れ、ヌっと差し出した時も、無言であった。

こんな様に前橋時代の元吉は黒いマントを着、いつも静かで、孤独なオーラに包まれていたような印象であった。

鎌倉に行った元吉を初めて家族で訪ねたのは、私が小学四年の春であった。ちょうどひな祭りの頃で、途中で元吉が好きだという白酒を買った。前橋のイメージと白酒というものが何故か不釣合いな気がしたのだが、訪ねた先にいた元吉は、どうしてしまったのかと思うくらい変っていた。まず、顔中クシャクシャにして、大きな声で笑う。そして、その白酒の小さなビンを、嬉しそうにあっという間に飲んだ後、あいたビンに水を半分入れてきて、ゆすいでそれも全部大切そうに飲んだのを見た時には、本当に腰が抜けるほど、元吉の印象が変ったのだ。

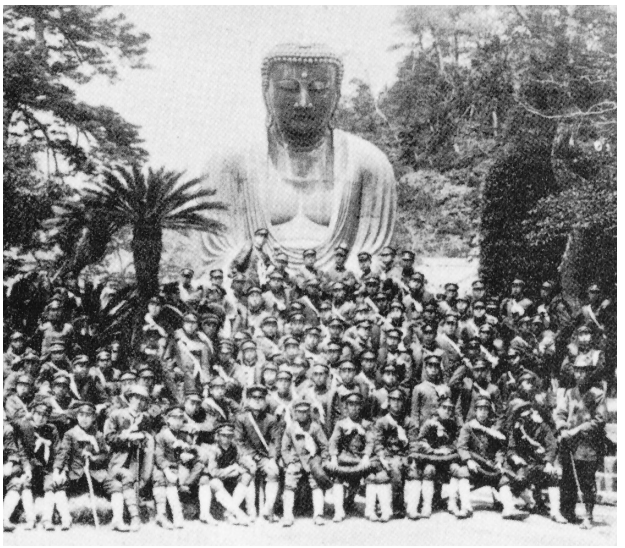
その後、毎年夏休みに家族で行くのを、元吉は首を長くして待っていた。

自分が海岸で拾い集めた宝物の入った箱を私に見せて、「好きなのをやるよ」とよく言われた。私がその中から、石や貝を選ぶと、すごく嬉しそうだが、又、すこしもったいないような、不思議な顔をして笑っていた。それらの一つ一つがどんなふうに綺麗で、どんなふうに愛らしいかを話してくれた。

私も、あの前橋にいた頃の元吉と同じような年になっているのだ。それなのに、相変わらず照れくさく、きちんと元吉のものを読みこんでいない。

ただ、元吉という人間そのものが、不思議で、美しくありのままの、野の花のような人だった気がしている。時々、ふっと遠くを見る目と、静かな孤独は、前橋にいた時も、鵠沼で亡くなった時も、ずっと元吉の中で変らなかったものだと思う。

私は、元吉の詩をそんなふうに、愛している。



江ノ島鎌倉方面修学旅行（大正６年）

衆参当選十一回、運輸大臣に

木暮武太夫（正一）

（明治二十六～昭和四十二／一八九三～一九六七）

伊香保温泉の旅館に生まれ、慶応義塾大学理財科卒業後、三井銀行に入ったが半年足らずで退社して帰郷。一九二四（大正十三）年の総選挙に父、一世武太夫の跡を継いで立候補し、三十一歳で代議士となった。衆議院議員に九回、参議院議員に二回当選し、この間、自由党政調会長、運輸大臣を務めた。六七（昭和四十二）年七月、参議院議員在任中に死去した。全国の温泉地の観光開発にも力を入れ国際観光旅館連盟会長、日本温泉協会長を歴任。県内でも群馬バス社長、群馬銀行会長などの要職に就き、地元の発展のため多方面で活躍した。

（明治四十五年卒）

帝人を再建、大臣を二回

大屋晋三

（明治十七～昭和五十五／一八八四～一九八〇）

明治十七年生まれ。東京商科大学（現・一橋大学）卒業後、大正七年鈴木商店（日商岩井の前身）に入社。大正十五年帝人に派遣される。昭和二十年帝人社長に就任。昭和二十二年民主自由党から参議院議員に立候補し、当選。昭和二十三年第二次吉田内閣で商工大臣、昭和二十四年第三時吉田内閣で運輸大臣を務める。昭和二十五年歌手だった大屋政子と様々な経緯の後結婚する。昭和三十一年帝人の業績が悪化したことから社長に呼び戻される。商品名「テトロン」で発売したポリエステル繊維がヒットし同社の急場を救う。この功績からか、昭和五十五年死去するまで社長だった。後年テレビ等のマスコミで売れっ子になった夫人の大屋政子氏が「うちのおとうちゃん」を連発したことでも有名。前中・前高関西同窓会会長を長年務める。

（明治四十五年縁故）

硬骨の言論人、同志社大総長を十二年

住谷悦治

（明治二十八～昭和六十二／一八九五～一九八七）

「字も絵もうまく、多才でハンサムな、悪魔も歯の立たないロマンティスト」（田畑忍の評）。住谷が前中、第二高等学校、東京帝国大学を経て、東大の恩師吉野作造の推薦により同志社大学法学部助手となり、業績を上げ教授となった時に、滝川事件（一九三三）のあおりを受け、「知人の紹介でたずねてきた見知らぬ一青年に旅費五十円を与えた」ことにより、治安維持法違反で京都西鴨署に拘置され、激しい拷問を受ける。釈放されるが、同志社大学教授の職を追われ、厳しい生活となる。

東大在学中には、『資本論』の翻訳に苦悶をしていた先輩高畠素之が本郷の汚い長屋を屢々訪れ、大きな刺激を受けたという。これに前後して、河上肇の『近世経済思想史論』（一九二〇）を読み深く感動し、マルクス経済学の研究に身を捧げることを決意している。同志社大学の学究としての『新

社会の夢と科学』（一九二五）は、出版と同時に発禁となっていた。

住谷悦治の思想の根元は、彼が幼少の時から強い影響を受け、二高の二年生の秋にその人から受洗した、叔父住谷天来のキリスト教・非戦主義、吉野作造の民本主義・新人会の大正デモクラシーと、河上肇のマルクス主義であったとされている。これらを統一するのが、前中を卒業する時に東京高等商船学校の受験に彼を駆り立てたロマンティシズムであったのだろう。（もし彼が合格していたら、彼の人生はどのようなものになっていただろうか。）

同志社を追われた悦治は、菊池寛等の働きで「文芸春秋」欧州特派員という身分でヨーロッパを見聞し、帰国した後、松山高等商業学校に職を得るが、『近世社会史』（一九四一）と高商論集発表の論文「統制経済と経済学的範疇」が当局によって危険と断じられ、再び職を奪われる。敗戦後、京都新聞論説部長、夕刊京都新聞社社長を経て、一九四九（昭二十四）年に同志社大学に経済学部講師として復帰する。

身内ではない二人目の同志社大学総長を三期十二年も続けることが出来たのも、住谷が終生、平和と民主主義の擁護に、行動するクリスチャンとして異議申し立てを行う言論人であったことによる。

（大正三年卒）

河合玉堂門下の日本画家

礒部寛太（草丘）

（明治三十～昭和四十二／一八九七～一九六七）

明治三十年三月旧宮郷村宮古（伊勢崎市宮古町）生まれ、宮郷小学校から明治四十三年四月群馬県立前橋中学校へ入学。その年、宮郷小学校から前中への入学者は三名。

はじめは寄宿舎に入ったが、やがて前橋駅前の「臥竜窟」という下宿へ移り、上級生から強烈な勉学の指導を受け、学年末にはクラスで七番の成績に躍進した。

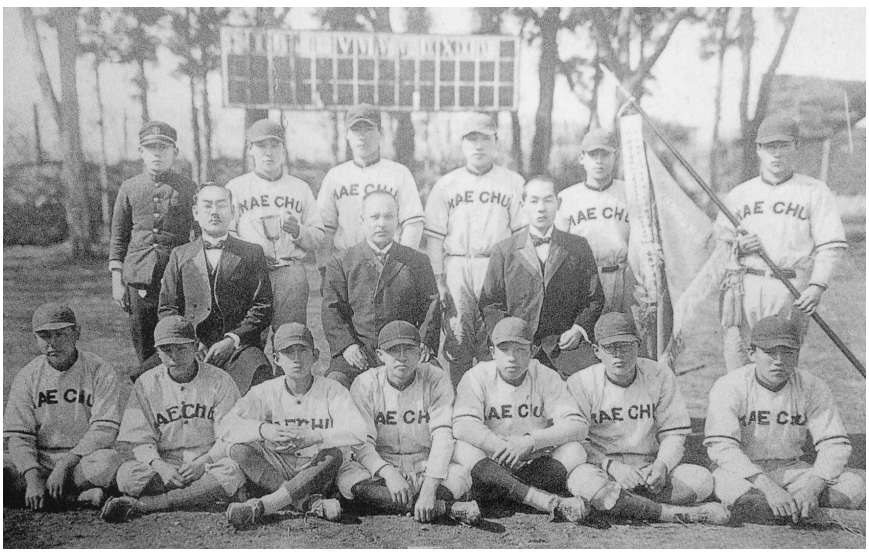
前中卒業後叔父の大塚保治の支援の下、大正八年河合玉堂の門下に入った。

大正十三年第五回帝展に「冬ざれ」で初入選を果たす。以後昭和四十二年に没すまで帝展、文展に何度も入選、数多くの個展を開催するなど活躍をした。

礒部草丘は前中時代に画家を志したのは同期の阿部国治（元川村学園理事、城南村荒砥出身、父は霞堂と号す日本画家）との親交で何度も聞かされた芸術論にひかれたことが大であったと述懐している。

「凩や上つ毛人の鼻っ端」の自作の句に表現されているように上毛の山河を多数描いている。

（大正四年卒）



野球部
（大正14年）
初の甲子園出場
を決めた野球部

高崎・白衣大観音の原型を制作

森村酉三

（明治三十～昭和二十四／一八九七～一九四九）

明治四十三年群馬県立前橋中学校入学。明治四十五年教諭排斥運動参加で退学。

後、沼田中学校、東京美術学校へと進む。

昭和二年第四部として初めて工芸部門が設けられた第八回帝展に「鋳銅飾花瓶・燈」が入選。以後第十八回展まで連続入選し、昭和十九年無鑑査となる。この間、昭和四年パリで開催された御大典記念日本美術展と昭和七年サンフランシスコでの汎太平洋博覧会に出品し、好評を博した。

また、昭和九年には昭和十一年に建立された高崎観音山の「白衣大観音」の原型を制作した。（大正六年準）

群馬美術協会創立に尽力した洋画家

横堀角次郎

（明治三十～昭和五十三／一八九七～一九七八）

明治四十五年群馬県立前橋中学入学二年後の大正三年にアメリカ留学の「行儀見習い」のため東京芝の正則中学校に転校。そこで椿貞雄と知り合い油絵を描き始め、後、岸田劉生の門を叩く。

大正四年十八歳のとき巽画会第十五回展に「自画像」を出品し三等賞を受賞、その後洋画家集団「草土社」の設立に参加、草土社展を作品発表の場とした。大正十二年の解散後、同年設立した「春陽会」へ移行し、第一回春陽会展出品「鵠沼風景」「静物」で春陽会賞受賞、翌年も受賞し無鑑査となる。春陽会の元老格であった。

昭和十六年群馬美術協会創立に尽力。戦後も昭和二十五年の県美術会第一回展から審査運営委員として参加、作品を発表していた。（大正六年準）

前橋市民文化会館の緞帳原画制作

南城一夫

（明治三十三～昭和六十一／一九〇〇～一九八六）

大正七年、群馬県立前橋中学校を卒業し上京、本郷絵画研究所に学ぶ。そこで、岡鹿之助、伊藤廉と親交を結ぶ。大正九年、東京美術学校西洋画科入学。大正十三年岡とともに渡仏。

戦争の気色濃厚のためやむなく帰国する昭和十二年まで十二年間滞仏。昭和十四年中学時代の友人、横堀角次郎の勧めで春陽会に出品。翌年、会友となる。当時のことを南城一夫は「前橋の中学校ではすでに大人の絵をかいていた横堀君が同級だったが、東京へ転校して行ったので再会したのは二十年も後のことであった」「日本へ帰ることは僕にとって、もはや絶望以外の何ものでもなかった。祖国は荒涼たる原野、ここには見るべき絵もなく、心を充たすものもなく、語るべき友もなかった。僕は郷里に妻と棲んで、ひとり酒をのんで鬱々として三年をすごした。二年目のとき中学時代の横堀角次郎君が訪れて来てくれた。それが機会となって春陽会へ出品するようになったわけである」と語っている。

以後、創作活動の全てを前橋で行った。

昭和三十年横堀角次郎、清水刀根、中村節也、神保和幸とともに五人展を前橋、鈴木ストアにて開催。以後名称の変更はあるが昭和四十二年まで開催した。

昭和五十七年、前橋市民文化会館大ホール緞帳原画「うさぎ野」制作。（大正七年卒）

アナーキズムに傾倒した詩人

萩原恭次郎

（明治三十二～昭和十三／一八九九～一九三八）

明治三十二年南橘村（現前橋市）に生まれる。明治四十五年前橋中学校に入学。大正五年には文芸雑誌「狐の巣」を創刊し、萩原朔太郎のところに出入りするようになる。大正九年群馬銀行に入行するが株式相場に手を出し失敗し、上京。以後「高等遊民的」な生活を送り本格的な創作活動を開始するが生活の糧のため、児童雑誌の編集などに従事。このころ詩誌「赤と黒」を創刊。大正十四年には第一詩集でダダイズムの記念碑的作品集となる「死刑宣告」を上梓する。その後アナーキズムに傾倒するようになり、岡本潤、辻潤などとも交友する。大正十三年頃帰省し、高橋元吉のはからいで煥乎堂に勤務したが、昭和十三年溶血性貧血で三十九歳で死去する。詩集に「断片」、「萩原恭次郎詩集」、「萩原恭次郎全詩集」がある。（大正七年卒）

応援歌・凱旋歌を制作

屋代周二（やしろしゅうじ）

群馬師範付属小より前橋中学入学。前中時代は、野球部投手。卒業式総代として答辞を述べる。東京帝大医学部に進学。医学部一年に在学中の大正九年の夏休み、第六回関東大会初出場の前中野球部の応援のため滞在した遠征先の竜ヶ崎にて、桜田校長の依頼により竜ヶ崎中との決勝前夜、応援歌と凱旋歌の歌詞を一晩で書き上げたという。このとき、「曲譜は取り敢えず一高の応援歌と凱旋歌の中比較的誰にも知られているものを借用し、直に練習して其の日の決勝戦に役立てた」という。

なお、『前橋高校八十七年史』に書かれた屋代本人の弁によると、「惜しむらくは永い間にだんだん間違って、意味の不明な所がある。之はどうしても自分の生前に訂正して置こう。斯う考えて私は筆を執った次第である。」とあり、同書に掲げられた歌詞は、今日の校訂譜とはやや異なる部分がある（下記参照）。

前橋診療所長。著書に、『各国人口増殖並に母子保健施設』『群馬の温泉医学』『沢渡温泉の古事来歴』がある。（大正七年卒）

応援歌

一
嗚呼　戦ひの時到る
枚を銜みて　幾月日
待ちし今日こそ　うどんげの
花はそびらに　咲きにけれ

二
鎧袖一触百錬の
かいなに降魔の　剣あれば
つづれ仕立の　敵塁を
落すに何か　事あらむ

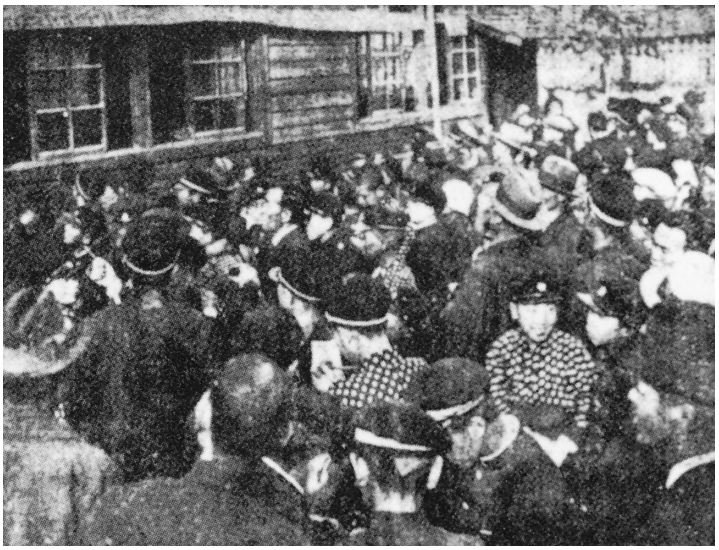
三
見よ中原の覇者や誰れ
双頬一朶の笑み　うかべ
成算既に　あるものを
あわれ燕雀　止めよ咄！

凱旋歌

一
そわ戦いの夢の跡
夕日の金流　爛々と
血刀さげし　ますらをが
誇りの頬を　照らすかな
いざわが友よ　手をとりて
共に歌わん　凱旋歌

二
隠忍茲に　数星霜
天下はじめて　平ぎぬ
蛟竜遂に　雲を得て
今昇天の　いでたちぞ
いざわが友よ　手をとりて
共に担わん　優勝旗

大正九年作



入試の合格発表風景（昭和５年）

前橋市長を五期二十年間

石井繁丸

（明治三十七～昭和五十八／一九〇四～一九八三）

明治三十七年一月一日勢多郡木瀬村大字野中（現前橋市野中町）に生まれ、大正十一年前中卒業後警視庁麻布警察署書記となり、十五年司法試験に合格。昭和二年日本大学法律学科を卒業し、同年法律評論社の編集記者、翌三年弁護士となり、前橋地方裁判所に所属。十二年から十七年まで前橋市議会議員、二十二年日本社会党より衆議院議員に当選。以来三回連続当選し、国会内では司法、農林、予算の各委員として活躍。三十二年には県弁護士会会長、日本弁護士会常任理事などを務め、三十三年日本社会党から市長選に立候補し第十三代前橋市長となる。以来五期二十年間市長の職にあり、商工業団地や住宅団地を造成、区画整理、農地改良などに大きな実績をあげる。四十八年より第四代前中・前高同窓会長として尽力、五十年勲二等瑞宝章を受章、五十八年三月前橋市初の名誉市民となる。同年十月八日、七十九歳で病没。

（大正十一年卒）

県美術学会常任理事として尽力

塚本茂

（明治三十六～昭和五十八／一九〇三～一九八三）

東京美術学校三年在学中の大正十三年に帝展に「緑蔭」で入選。昭和十三年文展無鑑査となる。戦後は群馬県美術会常任理事として尽力。

（大正十一年卒）

群馬大教授を務めた洋画家

清水刀根男

（明治三十八～昭和五十九／一九〇五～一九八四）

群馬県立前橋中学から日本美術学校洋画科に進み昭和二年卒業。昭和四年太平洋画会展で太平洋画会賞を受賞、翌年「窓辺裸婦」で中村彝賞を受賞。昭和六年第十八回二科展で「黒衣の女」二科賞受賞など中央画檀で注目される活躍をする。昭和二十五年から昭和四十五年の定年退官まで群馬大学教授を務め、創作活動とともに後進の育成に携わり、本県美術界の重鎮として多大な功績を残した。昭和五十七年　前橋市民文化会館小ホール緞帳原画「厩場の春」制作。

大正十一年卒では他に、小見辰男（上毛かるたの絵札を担当）川口精六・神田豊秋らがいる。

（大正十一年卒）

水墨画をフランスに紹介

飯島勇

京都絵画専門学校（京都芸術大）研究科終了後国立博物館絵画室長就任時代に水墨画をフランスに紹介。

（大正十二年卒）

修学旅行（昭和13年）奈良県吉野の蔵王堂にて

県下中学校・青年学校合同の連合演習（利根川をはさんで）

第二次池田内閣の官房副長官

細谷喜一（ほそやきいち）

池田勇人内閣時代の内閣官房副長官（事務）。池田内閣は昭和三十五年七月に組閣されたが昭和三十七年十二月に行われた総選挙後の第二次池田内閣の官房副長官となり、昭和三十九年七月までその任あった（池田勇人首相は昭和三十九年十月東京オリンピック閉会式の翌日に辞意を表明して佐藤栄作氏を後継に指名した）。（大正十二年卒）

県美術協会長を務めた洋画界の重鎮

中村節也（なかむらせつや）

（明治三十八～平成三／一九〇五～一九九一）

群馬県立前橋中学校卒業後東京美術学校西洋画科に進む。在学中一年生当時から多くの展覧会に出品し入選していた。昭和七年第二回独立美術協会展で「女絵師」「五九郎獅子」で海南賞受賞、第三回では「母子閑日」「肖像」で独立賞受賞。昭和十一年独立美術協会員になるとともに文展無鑑査となる。昭和二十五年群馬県美術展設立の一員となり昭和五十三年から群馬県美術協会会長をつとめた。（大正十三年卒）

曽根末次郎先生と生徒

大正十一年以降多くの画家が輩出している背景には、東京美術学校師範科で洋画を本格的に学び、大正八年から昭和八年まで前橋中学に赴任した図画の曽根末次郎先生の存在が強く影響している。曽根は洋画のいぶきを生徒に触れさせようと、自分の作品を教室や渡り廊下に並べて見せたり、生徒の作品で校内展覧会を開くなどした。

「曽根先生によって美術の新風がふきこまれ、当時はいわば、前中のルネサンスだった」と塚本茂は述懐している。

中村節也氏の著書「絵は愛なり」から教師と生徒との才能の出会いと可能性の開花が遺憾なく発揮された時代をみることにする。

「中学二年のとき曽根先生が赴任されて多くの人に影響を与えた。街角や公園などでごく少数の先輩が油絵を描いているのを、うしろから見て、私も描きたくなり、人まねでカンバスや筆、油などを買い、シボリ出しの絵の具（これは水彩絵の具）で描いてみたが油絵にならなかった。父から初めて油絵の具を与えられたときは、嬉しさいっぱいで夜も眠れなかった。私の考えは次第に絵の方向に傾き、日増しに強い意志となり、肉となってゆくのが目に見えてきた」

「三年の秋、校内に展覧会が開かれて私も出品した。曽根先生の影響か、絵を描き始めるもの、文芸にすすむもの、なかなか盛んな時期で、そしてそれは校外にもひろがっていった。校内の展覧会に、私は、『妹』という題で八号の油絵を出したが、あとで女を描いたという理由で校長から注意をうけた」

「曽根先生は、その後富山師範に転任され、そこで戦災に会い、大変困られ、師範の卒業生の人から前橋に連絡があって、先生に家を贈る話がもち上がった。

終戦直後のこととて皆現金もなく、私は金を作るべく、とっておきの写真機と双眼鏡を東京にもっていって売り、又絵を人に買ってもらい、ようやく金を作って先生に送った。

先生は、なかなか気骨があって、人に好かれ野球部長もされたが、図画の教師だけで、教え子たちから家を贈られるのは、やはり敬愛される先生の人徳があったのだと思った」